絵画教育における表現の多様性についての一考察

A sttudy of Variety of the expression in painting education.

丹　治　嘉　彦

１．はじめに

一般的に絵を描く事は紙と鉛筆があれば誰にでも簡単に出来る表現として広く認識されている。例えば，各教育機関における図画工作や美術の授業の題材に用いられることもれば，公民館活動等の絵画教室において絵を描くことが幅広く実践されていることからも理解出来るだろう。特に絵画がどのように扱っているかを新潟県を例にして見ると，各教育機関等が主体となった展覧会が多数催されていることがその表れともなっている。新潟教育アート展，新潟県ジュニア美術展覧会，中越教育アート展，新潟県児童生徒絵画・版画コンクール等がこれにあたるが，これらの展覧会は子ども達の作品を広く知ってもらうことと，そしてそれを通しての美術教育の発展が大きな目的となっている。その中でも新潟教育アート展の開催趣旨では，『子どもたちに絵の描き方や作品のつくりかたを教える「造形教育」から，つくりだす喜びを味わい，想像力を育て，豊かな情操を養うなど，人としての生き方を培う「造形を通した教育」へと変化する２１世紀の造形教育に対応する美術展を志向し，児童生徒の健やかな成長と図工・美術の進展に寄与したいと願い，計画いたしました。』と記載されており，このことから子どもたちの成長に表現が如何に重要であるかが伺える。これらの展覧会において注目すべきは，展覧会の構成が絵画をメインに据えての展示となっていることである。教育現場において絵画以外にも彫刻やデザインと言った領域も当然のことながら学ぶべき表現形態ではあるが，展覧会においては絵画を扱うのは扱いやすいこととして認識できるとともに，そのことが絵画が幅広く重要視されている証ともなっている。

そのような中，それぞれの展覧会を見て感じるのは，絵画の表現の幅が広がっていることである。風景画や人物画と言った見えるものを支持体に表現する作品も然ることながら，支持体に布を張り込んだり，あるいは写真をベースにして色を塗込んだ作品など，様々な手法を用いて表現に至るケースが目につくようになった。このように支持体に絵の具を塗って表現する単一的な形態から複数の素材を用いて表現されていることは，美術教育において表現の幅が広がったことの表れと判断出来る。以上を踏まえ絵画表現が多彩な広がりを見せている現状において，絵画が有している表現の可能性を明らかにしたい。

２．絵画を成立させる諸条件について

(1). 素材

絵画を成立させるための条件として色彩を施しながらの水彩画や油絵等の表現，あるいは鉛筆や木炭等を使用しながらの表現を留めておくためには支持体が必須となる。（立体あるいは空間造形においては，木，石，あるいは鉄と言った素材がその表現に使われ，直接支持体を用いることはない。）またそれに表現を施すため，絵の具や鉛筆と言った素材が使用され，制作者の意図に従って表現に至っている。また絵画の歴史を紐といてみると絵画を成立させるために様々なものが支持体として機能していた。例えば中世ヨーロッパにおいて盛んに描かれたフレスコ画がその一例として上げられるだろう。フレスコ画は壁に塗られた漆喰にアルカリ性の顔料を水で溶

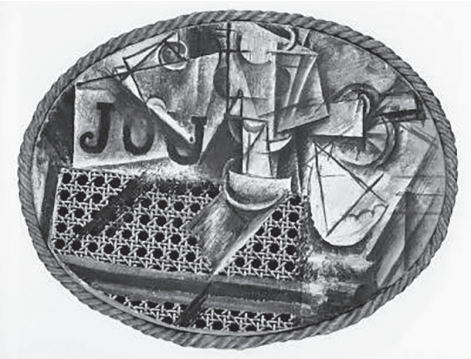
2017.6.26　受理

いて塗りあげて表現に至っているが，その目的は協会や宮殿等の建築物の壁面を飾る事にあった。

３．新たな表現の出現

(1). コラージュを起点として

20世紀以前絵画は支持体に形を描き色を施して表現に至る形が一般的とされ，それをもとに様々な絵画作品が生まれたが，特に19世紀は産業革命等の技術革新によって世界が変化して行く中，絵画もまた様々な手法を試され表現の深化を見ることとなった。その特徴的な手法としてフランスで生まれた印象派の画家の作品が上げられる。印象派は今までの伝統的な絵画とは一線を画し，その多くが明るく色彩豊かに表現され，屋外の光や空気と言ったものを感じ取りながら時間によって移りゆく光や影の変化等を中心に表現されている。その後，印象派の表現形式の影響を間接的に受けたピカソやブラックが，平面上に紙や木等の素材等の複数の断片を貼付け独特の表現形態を作り上げた。ここで生まれた表現はコラージュと呼ばれたが，このコラージュはそれまでの表現とは一線を画し，非現実的な表現として一般的には認識されている。このコラージュを施した代表的な作品ピカソの「藤編み椅子のある静物」1912年作を見てみる。



(図1) ピカソ「藤編み椅子のある静物」1912年

その内容は藤の椅子を絵の具等で描くのではなく，それ自体を作品の一部とし果物等を実際に描き多様な演出を施して表現に至っている。また，平面上に貼る行為と描く行為を合体させた空間を演出したこの絵づくりから読み取れるのは複数の状況を出現させたことで，多義的な解釈が可能となったこと。このコラージュに関して藤村克裕は「様々な素材を用いて貼付けられた画面に，さらに，線や面が加えられる。貼り付けられた紙の境目，周囲，つまり輪郭を超えて1本の線が引かれた瞬間，まったく別の意味が画面に，ということは，貼り付けられる地の側の画用紙と，貼り付けられた紙との関係が，新たな意味を帯びる。その意味とは，透明感の現出ということである。言い換えれば，相互の遮蔽関係があいまいになって，どちらが図でも地でもよいというか，絶えず反転してよいというか，そういう関係が生じるということだ。」（注1)と述べている。藤村によるコラージュの考察は，それまで筆によって平面上に描く一方的な行為とは一線を画し，平面上において複数の状況があらわれそれによって混沌とした世界が生まれることの重要性を言表わしている。このようにコラージュによる表現形態は，平面上に貼る行為と描く行為を合体させ混沌とした空間を演出したわけだが，この混沌とした絵づくりと多義的な解釈と読み取りが生まれることがコラージュの特徴と言えるだろう。またピカソの作品を例に上げるまでもなく，絵画表現が筆で描く形式に加えてコラージュを含めた様々な方法を駆使した多彩な作品が数多く生まれた。この表現形式は多くの画家が引用しただけでなく，美術教育の現場においてもコラージュ表現などを引用した作品を見ることができる。

(2). 写真表現

コラージュを用いた表現が美術や図工の時間において用いられるようになったとともに，写真を使った授業もコラージュ同様目にするようになった。もともと写真は19世紀に発明されたもので，光を媒介として穴やレンズを通して対象を写し込み，感光剤に反応させた後に現像処理を行った後に写真となり，これを薬品処理した後に写真として見ることが出来る。写真の根源的な意味としては，一瞬の風景を抜き取りあたかもそこに存在していたことを正当化させる体験的なリアリティをもったもので，その機能としては広報的なもの，遺跡調査等学問研究のための資料等，あるいは芸術表現のために引用され一枚の写真として広く世界に広まっている。また写真は絵画表現においても様々な形で引用されてきた。もちろん写真そのものが芸術的評価を得て，単一的な形で存在価値を示したことも写真としての意味を広く知らしめたことも繋がったが，例えば1960年代，抽象表現主義を代表するアーティスト，ロバート・ラウシェンバーグや同じ1960年代にポッ

プアートの騎手として活躍したアンディ・ウォーホルはそれぞれ写真表現を自身の表現に積極的に引用して表現の深化を図った。ロバート・ラウシェンバーグは自身の作品に日常生活で使われている様々なものを作品に組み込みこんだものが特徴的とされており，その中で写真も同様に扱われ「コンバイン」という名称で発表された。この形式は組み合わせとも呼ばれ，平面絵画のもつ垂直性を解体して多層的な意味を絵画に宿らせたと言えるだろう。例えば，1963年に制作された「Retroactive I（遡及I）」を見ると，写真表現を多数引用したことにより様々な意味を作品から発することに繋がった。宇宙飛行士，野菜，そしてケネディ大統領等がそれぞれ写真表現

（図２）ロバート・ラウシェンバーグ
「Retroactive I（遡及I）」

として作品上に展開されているが，これらの図像は作品において明快に写り込んでいるわけではなく，むしろ作為的に解像度を落とした形で表出されノイズともとれる扱いになっている。そのノイズを含んだ図像が支持体上で色や他の図像を重ねられたりすることにより，作品において主体的な意味が剥ぎ取られ全てのモチーフが並列化されたことがラウシェンバーグの作品上の特徴と言える。これら一連のコラージュ（写真表現）を用いた制作は絵の具で色を塗り込む今までの絵画の制作と同じ意味を持つのと同時に，世の中の出来事等を写したった表現がダイレクトに流布することで，フラットな形を見ることによりその意味に慣らされてしまうことに繋がってしまう。そして作品から世界との距離感を再認識させられることにも繋るのである。

また，ポップ・アートの代表的アーティスト アンディ・ウォーホルも写真表現を作品に数多く引用したアーティストで，ウォーホルを木島俊介は『「ポップ･アート」とは「ポピュラー」つまり，「よく知られた」あるいは「大衆化された」，さらには「わかりやすい」イメージを採用するアートというほどの意味であり，字義どうりにここでは，量産された物のイメージが「わかりやすい」，つまり写実的な描写によって表される。』（注2）と位置づけている。ウォーホルの作品はマリリンモンローやキャンベルスープの缶詰の写真等を引用してシルクスクリーン版画として扱ったものが一般的に知られている。ウォーホルが扱ったモチーフは，上記のように大衆の周りにある事象等が主であった。それらをシルクスクリーン版画に転用し，連続して繰り返し平面上に表現された。現代社会においてこの継続された反復されたウォーホルの作品に対して木島俊介は以下のように述べている。『大量生産，大量消費，大量伝達の時代には，いかなる希有な出来事も瞬間も複数性のなかでリアリティを剥がされ，意見を述べることのない無意味なものの無数の集積と化してしまう。ここに時代のダイナミズムを見るにせよ，虚無をみるにせよ，採りあげられるイコンは，記号は「よく知れたもの」の引用であるほどよい。なぜなら有名なものとは引用されたものであるし，引用されたものほど，記号化される過程のなかでダイナミズムを発揮するからだ。』（注3）木島がここで述べているように，ウォーホルの制作においてその題材となっているのは普段何気なく見ているものを作品の中に扱っているが，それぞれの題材はウォーホル自身直接手に取ってその意味を掘り下げて表現に至ったわけではない。むしろ，表層的に流れる一の情報として受け取り，それを彼の優れた感性から表現へと導き出したのである。例えばマリリン・モンロー（20回）においては作品上に20のマリリン・モンローをシルクスクリーン（写真製版）にて表現されているが，実際にウォーホルがマリリン・モンローと対峙し，言葉等を介してイメージを紡ぎ出したわけではない。ウォーホルは彼女が印刷された雑誌等から作品に引用したと言われており，オリジナルなものを表現の筆頭に位置づける今までの表現とウォーホルのそれとは一定の距離間があること分かるだろう。それはそれまで唯一無二な「独自なもの」

が芸術の根本にあることがそれまでも優先されたが，そうではなく「複写」（写真をベースとしたシルクスクリーン版画）を通して同じ表情を連続的に表現したことも芸術作品に成り得るとウォーホルは証明したのである。その見慣れた風景や事物が作品に位置づけられたことによりウォーホルの作品と鑑賞者との距離がより一層寄り身近になったことは言うまでもないだろう。しかしながらその距離間は作品が目に触れる機会が増えたことではなく，「複写」が見る側を選ぶのではなく見る側の平等性に繋がったとともに，誰もが分け隔てなく繋がる契機となったことは間違いない。

（図４）アンディ・ウォーホル
マリリン・モンロー（20回）1962

３．学校教育における写真表現について

(1) 新潟大学附属新潟中学校の実践から

学校現場において絵画表現が積極的に実践されており，特に子ども達の興味対象の広がりが美術教育の役割であるとしたら，なにものにも縛られず自由な発想のもとに表現が行われる絵画表現こそ理想型であるだろう。しかしながら，自由に描く行為を主体とした絵画離れが学校現場で進んでいるようだ。その理由として大阪教育大学の花篤寛は「毎年講義の初日に『小・中学校を通して好きな教科と嫌いな教科』のアンケートを行ったが，残園ながら図工や美術はいつも嫌いな学科の上位にランクされていた。理由は圧倒的に多いのが『下手だから』という回答で，その内容は写生画（絵画）が多い。美術の学習能力をいわゆる上手下手といった巧緻性や技術，または特殊な才能の問題として受け取られてしまっている。」（注:4）と述べている。また筆者も教育実習の指導で訪れた新潟市内の中学校において，「上手く描けないので先生描いてください」と実習生に懇願する生徒を多々見ることがある。生徒が絵を描く際，上手く描けたかを教師が重視していることが分かる一場面であった。この事例から生徒の視点から絵画を考察するならば，技術的なことを習得できないと絵画に対して苦手意識をもってしまうと判断できないか。これらの状況を鑑み，絵画に対して関心を深めたり，あるいは絵画の表現を楽しんだりする新たな手だてとして新潟大学附属新潟中学校美術科 田代豪教諭は平成25年度中学校教育研究発表会において，造形要素を明確にした試行活動を通して構成力を高める授業「砂丘劇場」を行った。絵画表現の可能性を追求する中で写真表現を積極的に活用したのである。（生徒に絵を描く行為を今までとは違う角度から捉えることに繋がる。）それは絵の構想を練った後に下書きを行い画用紙等の支持体に絵の具を塗って表現に至る一連の行為からの脱却を意味し，「砂丘劇場」をベースとして絵画を立体的に補足し作り込んだそれぞれをカメラで撮影し写真に表すことを表現の柱に据えたのである。授業においては，素材（黒い紙，砂などの材料，写真）を組み合わせて写真を撮影し，物語（砂丘劇場）を表現することを表現の筆頭に据えて取り組むこと，そして「砂丘劇場」を制作する上での目標は以下の通りである。

〇形の単純化や省略，強調を通して，人物などの感情や行動が表れた素材をつくることができる。
〇造形要素を基に素材の構成や撮影の効果を比べることを通して，より一層主題に迫ることができる。

また田代教諭は生徒が本題材における思考を促す手だてとして，以下３の項目をあげて授業を組み立てた。

〇構成の効果を感じ取れるモデルを提示する。
〇繰り返し試行できる環境を整備する。
〇素材を構成し撮影した写真から造形要素を意識さ

せる。田代教諭が上げたそれぞれの手だては，生徒が気軽に制作に入ることを念頭においたものとなっている。
例えば，構成の効果を感じ取れるモデルの提示は人体等を縮尺した形でマケット制作を行う。これらは紙とはさみが揃えば手軽に作れる上に特別な技量も発生しない。また作る材料も紙であり，失敗してもそこからやり直すことも容易である。そして出来上がった素材を思い思いに配置してそれらを撮影するが，これもマケットの制作と同様に作品上の配置が気軽に変更を行える。これらの過程から表れるのは立体的な形状になるが，それぞれの表現において技術的優位性を求めるものでない。そうではなく，表現において簡単に形状が表れるとともにそれ自体を何度でもやり直せることにこの授業としての意味がある。

生徒たちは劇場となる舞台を制作しそれを撮影して表現に至るが，田代教諭は一連の表現に対して生徒たちにより深く興味をもってもらうための支援として，切り絵の手法により素材を正確に切り出す。絵コンテを基に素材を構成させる。そして撮影した写真は削除させないで構成・撮影の工夫が対比できるよう残させておく。これらは田代教諭から生徒への作品の完成に向かうためへの具体的な支援となっているが，そのいずれもが絵画の文脈から導いたものと言えないか。（絵画制作の指導を行っているわけではないことは田代教諭の題材の構想全8時間本時6/8から伺える。

(2). 絵画から導き出された表現

この劇場の制作は立体構成を主眼とした取り組みではあるが，むしろ絵画との緊密さを感じられずにはいれない。例えば「構成の効果を感じ取れるモデルの提示」は支持体に絵の具を塗る行為を連想させるとともに，「繰り返し試行できる環境を整備する」は画面上において絵の具を塗りかね作品を完成させること，そして「素材を構成し撮影した写真から造形要素を意識させる」は完成した絵画を鑑賞することに読み替えられる。むろん生徒にそのような意識をもとに制作には臨んではいない。しかし，劇場を制作し写真で表現するこの授業の中での展開は，学校教育における絵画表現，あるいは作品の鑑賞に通じている。　これら一連の取り組みは生徒達にとって表現の可能性を追求する中で写真表現を積極的に引用しすることで，絵を描く行為を今までとは違う角度から捉えたことに繋がらないか。いわゆる絵画の基本とされる絵の構想を練って下書きを行った後に，画用紙等の支持体に絵の具を塗って表現に至る行為から脱却して，「砂丘劇場」として絵画を立体的に捉えて作り込みカメラで撮影し写真に表すことにそれが具現化されている。

絵画表現が苦手である言った声が子ども達から聞こえるが，学校現場において絵画表現はあまりにも近い距離にある表現形態であり，しかも自然体で臨めることから広く題材として取り扱われていることは紛れもない事実である。しかし，子ども達の興味の対象が様々な領域に広がりを見せている中，絵画表現を授業において積極的に取り上げずらくなり，絵画の新たな展開が打ち出し難くなっている。そのような状況下において，新潟大学附属新潟中学校教諭 田代豪が行った造形要素を明確にした試行活動を通して,構成力を高める授業を実践したことは，停滞する絵画表現に新たな展開に道筋をつけたと言えるだろう。本来表現のすばらしさはそれぞれの表現を可能とする素材や技術によって触発されることによるが，例えば彫刻であるなら石や金属，あるいは木材がインスピレーションを掻き立てる。デザインであるならキャッチコピーや商品にその意味を見いだすだろう。そして絵画は描こうとする対象物から得られる情報によってそのきっかけを掴む。それが今までの芸術が果たしてきた役割でもあっただろう。しかしながら表現の交流が積極的に行われ，それによって芸術表現の可能性が広がったことにより新たな表現形態があらわれたわけだが，その代表的な表現が支持体に整合性のない素材を貼付けるコラージュである。バラバラの素材を組み合えることによって画面上では整合性がとれない様々な表情が見られることとなる。この事実は美術教育においても積極的に引用されたが，写真を使って表現に至った田代教諭の実践はまさにこの自由度が高いコラージュをベースとした新たな取り組みと言えるだろう。

この写真を使って行われた授業は，技量を基準に中心に組み立てられていた今までの授業形態から脱却し，自由な発想から生まれるイメージをその筆頭に位置づけられるとともに，制作段階において複数の生徒の考えや思いが盛り込まれたことが特徴と言える。絵画の視点から取り組んだものであったが，結果的にはそれ以外の表現も柔軟に取り入れている。例えば，人型の模型を作り上げる過程は彫刻的要素が盛り込まれているし，それを舞台に見立て

8　題材の構想　（全８時間　本時６／８）

目的意識	生徒の意識	学習活動・学習内容	場面と思考	教師の支援・指導	評価の方法
素材を組み合わせて撮影した組み写真から主題を表現しよう	砂漠にある卵の物語をつくりたい	①　砂漠を舞台にした物語をつくり出す。 ○　砂漠にある卵から孵った雛と人々のその後を想像し，物語をつくり出す ・　物語の主題を考えて物語を構想しシナリオを書く。 【シナリオの作成】	i	○　物語の冒頭を提示する。 「ある日，忽然と現れたひとつの卵。人が見付け，人が人を呼んできます。やがて卵は…」 ・　その場で素材を構成し撮影して，生徒に提示しながら物語を表していく。 指示：　卵と人とのかかわりを物語にして展開させなさい。	関① 発①
	どのように素材を構成すれば主題を表せるかな	②　物語の構成の構想を練る。 ○　構成のモデルを基にして，４場面をスケッチする。 ・　絵コンテを描き，表したい主題を具体化する。 【イメージの具現化】	ii 比べる	指示：　構成のモデルを基に，登場人物などを配置し，各場面の構成をスケッチしなさい。（手だてア）	発②
	どんな素材があれば，主題を表すことができるかな	③　主題にふさわしい素材の写真を撮影する。 ○　４人グループで必要な素材をカメラで撮影しあう。 ○　カメラのフレーミングを考えたり，カメラの機能を使い分けたりして素材を撮影する。 【カメラの使い方の工夫】 ④　主題にふさわしい素材をつくる。 ○　主題に相応しい写真を取捨選択する。 ○　印刷する写真の大きさを決定する。 ○　写真に黒い紙を貼り付け，素材を切り出す。 ○　差し込み部分をつくり，素材の上下を決める。 【形の単純化】		指示：　必要な素材をカメラで撮影しなさい。 ○　モティーフは全体が入るように写真を撮ることを基本とする。 ○　物が重ならないように写真を撮らせる。（手だてイ） 指示：　主題にふさわしい素材を切り出しなさい。 ○　切り絵の手法により，素材を正確に切り出す。 ○　大きいサイズの素材はA4サイズの用紙に，９枚写真を印刷したものとし，小さいサイズの素材はインデックスプリントしたものとする。	技①
	素材を組み合わせて構成し，撮影した写真で主題を表現しよう	⑤　主題を表現するために，素材を組み合わせて構成し撮影する。 ○　段ボールに砂を敷いたホリゾントに素材を組み合わせて構成し，構成した素材を撮影して主題を表現する。 ○　主題を観点として，撮影した写真と写真を見比べて，自分の主題に合った写真を選択し，各場面を表現する。 【素材の構成と撮影】	iii 比べる	指示：　ホリゾントに素材を組み合わせて構成し，カメラで撮影して主題を表現しなさい。（手だてイ） ○　絵コンテを基に素材を構成させる。 ○　撮影した写真は削除させない。構成・撮影の工夫が対比できるように残させておく。	関① 技②
	工夫すれば主題を表すことができそうだ	⑥　４枚の写真を見比べ，表現の違いを説明する。 ○　写真を見比べることで，造形要素の違いにより写真から感じ取られる印象の違いを説明する。 【造形要素の整理】 ⑦　主題を表現するために，造形要素を明確にして素材を構成し撮影する。 ○　造形要素を観点として，表現方法と素材を関係付けて，自分の表現意図に合った表現方法を工夫する。 【創造的な表現の工夫】	iii 比べる 関係付ける	発問：　写真の作者は，どのような点を工夫して表したいことを表現していますか。また，その工夫にはどんな効果がありますか（手だてウ） ○　複数の生徒に指名し，造形要素の違いとその効果を全体で共有する。 発問：　どの要素に着目すれば各場面で自分の表したいことが表れますか。 （手だてイ） ○　造形要素を観点として，素材の大きさ，砂丘の広がりや遠近感の表し方，ぼかしの生かし方などを工夫させて写真を撮影させる。	関① 技① 技②
	もっと主題をはっきり表現できそうだ	⑧　最初の撮影した写真を基に，必要な素材をつくりだし，主題を再表現する。 ○　前回撮影した写真を基に，新たな素材をつくり出したり，素材を再構成したりする。 ・　必要なポーズなどの撮影。 ・　写真に黒い紙を貼り付け，素材の切り出し。 ・　クラスの作品鑑賞。 ・　新たに気付いた構成の方法の試行。 【素材の再構成】	ii iii 比べる 関係付ける	指示：　必要な素材をつくりだし，よりよく主題が表れるように素材を構成しなさい。 ○　４枚の写真を組み合わせて作品とし，主題を表現させる。 （手だてイ）	関① 技① 技②
	作品からどんな主題が読み取れるかな	⑨　作品から主題を読み取る。 ○　タイトルとキャプションを付ける。 ○　各グループで作品を鑑賞する。 ・　作品の順番，素材の形や構成，キャプションを手掛かりに主題を読み取り，よさやおもしろさを味わう。 【形や構成がもたらす感情の理解】	iv	指示：　作品にタイトルとキャプションを付けて，解説しなさい。 指示：　４枚の組み写真とキャプションから，作品の主題を読み取りなさい。 ○　写真の順番や写真に構成された素材とその構成，キャプションから，物語の主題を読み取させる。	鑑①

２年生　美術　砂丘劇場　レポート

「　　大きくなる卵と四人

場面	写真	解説		主題
1		ある日の夕方、何も無い砂漠で、一つの大きな卵を見つけた。 その卵はどんどん大きくなっていくようで、高い値がつくと考えた一人の人は、町へ持ち帰り、売ることにした。	⇨	欲のままに行動しても、損をするだけだ。
2		卵があまりにも大きかったので、人は人を呼び、四人で運ぶことにした。 いざ、運ぼうとすると、卵はミシッと音を立ててひびが入った。 四人は何が生まれるのかと、見ていると…	⇨	
3		卵からは、いっせいに植物が生えてきた。 四人は焦り、卵に生えてしまった植物をむしりとる。しかし、植物はどんどん生えてきてとってもとってもきりがない。	⇨	
4		やっとのことでとり終わったときには朝になってしまった。 だが、卵はエネルギーを出し切ったのか、普通の卵と同じくらいの大きさになってしまった。 四人は努力が水の泡になったことを怒り、卵を投げ捨て、帰ってしまった。 卵がまた、大きくなっていったことも知らずに…	⇨	

（図5：生徒作成　絵コンテ）

る様は建築的な視点に他ならない。これらの表現を随所に盛り込みながら作り上げた授業実践であったが，最終的に表現されたものは絵画として開示させている。このことから絵画が表現の源となっていることが理解できるだろう。

４．絵画表現の新たな可能性

「絵画においてコラージュ等の筆を直接使わない手法が確立されたことによって，表現においては無限といってよい種類の素材を手中に収めることができるようになった。すべての素材が素材として，はたまた要素として，「隣り合う」という関係の成立を待ちわびているといってよい。しかし，「隣り合う」のみの関係というのは今日ではきわめて日常的な事柄である。あるいは正確にいえば，コラージュという方法が登場したことによって，実は「隣り合う」のみの関係というのは今日では極めて日常的な事柄である。」（注:5）絵画作品においてコラージュを施すことにより，作品上に表れる形態のリズム感や色の変容を積極的に促しその進化を見せたことは言うまでもないが，それに加えて作品から日常を喚起させ日々の生活や営みを振替えさせる機能を見せたこともその特徴となっている。藤村は次のようにも言っている。「正確に言えば，コラージュという方法が登場したことによって，実は「隣り合う」のみの関係というものがつねに，いつも，たえず私達を取り囲んでいる，ということを発見できる視点が生まれてきたのである。」（注:5）表現が社会と関わることでそのリアルさが増すのであって，その日常に寄り添うことにより見えないものを可視化させてくれる。すなわちコラージュによってあらわれた表現は自分達の環境に対して新たな気づきを促す作用が宿っていると言えるだろう。また田代教諭が実践した造形要素を明確にした試行活動を通して構成力を高める授業「砂丘劇場」においても同様の意識が読み取れる。表現の最終形体が写真に至るが，そこまで様々な表現様式を施している。例えば生徒同士の協働作業で劇場を作り込む様は，人同士が関わり合うことで紡ぎ出したコラージュとも言えないか。

５．まとめ

絵画は我々の生活空間上至る所にそれを見ることが出来る。これは我々の生活にとってあまりにも自然な出来事であり，そのため絵画が生活の一部と切り離せない関係となっているとも言える。またその絵画においてコラージュを行う意義はあまりにも大きい。コラージュとは原理的には糊付けを意味し，支持体に関係のないもの同士を貼り合わせることで絵画表現の多面性を演出することにあり，ピカソ，ブラック，そしてラウシェンバーグ達がこのコラージュを通して様々な作品を発表して絵画の発展に寄与し，現代においてはコラージュを施した表現が絵画に留まらず様々な領域に及んでいると言える。その一例が造形要素を明確にした試行活動を通して構成力を高める授業「砂丘劇場」である。物質的な芸術作品を「もの」として理解するなら，作品が作られる場において様々な形で関わることの出来る機会を設ける「こと」が現代のアートシーンにおいて定まったこととして認識される。（これは生徒達の協働から生まれた一連の制作過程がいわゆる「こと」に相当する。）この「こと」の連続性が絵画表現におけるコラージュとして読み替えられるだろう。それは支持体に糊付を施した表現が現れるものではなく，いわゆる生徒同士のやり取りから生まれた「こと」を媒介としたコラージュであると判断できる。絵画から派生したコラージュだが，協働を通して行う「こと」にもそれが当てはまるのである。このコラージュなどの表現を絵画に留めることなく，多方面に引用しその解釈を広げることが絵画教育の次の扉を開くことに繋がるのである。

注・引用文献

注意１　藤村克裕,『造形の基礎を学ぶ』角川書店,1998,p151
注意２　木島俊介,『アンディ・ウォーホル展』カタログ,中日新聞社,2000,p11
注意３　木島俊介,『アンディ・ウォーホル展』カタログ,中日新聞社,2000,p17
注意４　花篤寛,『美術教育の理念と想像』黎明書房,1994,p28
注意５　藤村克裕『造形の基礎を学ぶ』角川書店,1998,p153